

# 巻頭言

## 離れてみて分かる

生まれ育ったのは、福島県会津若松市だ。「白虎隊」で有名なあの土地に生まれたことを今は誇りに思っているが、住んでいた時は嫌だった。なにせ暗いし雪深い。山に囲まれているせいか天気が変わりやすい。おまけに盆地なのでじめじめしている。新幹線の通っている郡山から磐越西線で会津若松まで1時間ちよつと。冬、郡山はからつとしてるのに、電車が進めば進むほど、雪に覆われていくその様に、いつもどんよりした気持ちになる。「早くここを出たい」。中学生、高校生の頃はそればかり考えていた。東京に対する憧れもあったし、もつと言えば東北イチの都会、杜の都仙台にも憧れていた。

ところがなぜか名古屋に住むことになった。今となっては東京に行かなかったことを微塵も後悔していない。名古屋に住んで良かったと思っている。よく「東京に行かないの？（来ないの？）」と聞かれるが、その気持ちはない。なぜかは分からない。自分の【つくりかた】には名古屋が合っているのかもしれない。いや【合っている】のが、【自分が合わせた】のかも分からない。ただ名古屋に生まれ育った人たちより、名古屋を客観的に見ている、名古屋のいいところをいろいろ発見できたからではないか、と思っている。

「離れてみて分かる故郷のよさ」というのがある。他にも「別れてみて分かる恋人のよさ」とか「やめてみて分かる酒のよさ」とか「捨ててみて分かるあの服の肌ざわりのよさ」とかそういうのがいろいろある。名古屋に住んでみて、会津のこと、福島のことをより書きたくなくなったし、震災があつてからはなおさらそう考えるようになった。逆に言えば、名古屋で生まれ育っていないなかつたから感じる名古屋のよさ、もあつたりするわけだ。近づいていたものが離れた時、離れていたものが近づいた時、距離が変わつた時、そこに「ほどよい客観性」が生まれ、育っていく。

今日（3月1日）、文化庁の海外研修で初めてロンドンに行く。離れてみて分かることがどれだけあるのか、それが楽しみだ。

鹿目由紀

KANOME, Yuki